The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中古和文物語作品における「カクテ」と「カカルホドニ」について
Author(s)	百瀬, みのり
Citation	詞林. 2018, 63, p. 36-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/69768　　詞林　第63号　2018年6月

中古和文物語作品における「カクテ」と「カカルホドニ」について

百瀬みのり

一．はじめに

本論は、中古和文物語作品における接続語[1]「カクテ」と「カカルホドニ」の意味、用法の差異について述べるものである。従来この二形式については等質のものとして扱われることが多く[2]、その差異については特に述べられてはこなかった。そこで本論では「カクテ」と「カカルホドニ」の、中古和文物語作品における使用を調査し、その意味、用法に注目してその差異を明らかにしたい。

今回行った調査によれば、「カクテ」と「カカルホドニ」は、それぞれで表される、物語の話（エピソード）と時間のかかわらせ方が異なる。「カクテ」は物語の話を日付のような客観的な時間の情報と共に区切り、整理して時間の流れと継起的に述べるときに用いられる。一方「カカルホドニ」は、物語の話を時間の流れの中で重複的に述べたり、「カカルホドニ」で数年にも渡るような長時間の時間の経過を表すなど、物語の話を時間の流れの中で経過的に述べていくときに用いられる。つまり、この二つの接続語は物語の話を時間の情報と共に述べる際に用いられる接続語である点は共通しているが、物語の話と時間の情報とのかかわらせ方に差異があると考えられる。

二．先行研究と問題の所在

「カクテ」と「カカルホドニ」のような指示詞由来の接続語についての関心は一九七〇年代から見られた。それについて三苫（一九七三）は「作者の一種の筆癖」（三九頁）と考え、高橋（一九八五）は「カクテ」や「カカルホドニ」のほかのカ系接続語（「カカレバ」、「カカレド」など）とサ系接続語（「サテ」、「サルホドニ」、「サレバ」、「サレド」など）の機能について、指示内容の具体性と抽象性（一四頁）という観点で整理し、説明を行った。特に「カクテ」については中野（一九八一）が『栄花物語』中の「カクテ」を取り上げ、その使

用について「連続的に綴ろうとする（略）意識の表われ」（三三一頁）とし、渡瀬（一九八一）は『源氏物語』の「カクテ」の役割について、「違った話題の記事への転換と、質の異る叙述への転換」（一七頁）[3]とした。

これらを踏まえ、「カクテ」と物語展開とのかかわりを具体的に示したものに糸井（一九八七）西田（一九九九、二〇一〇）がある。[4] 糸井（同）は中古の和文物語、日記、随筆を資料とし、そこで用いられている「カクテ」を「サテ」と比較して「歌の直前に用いられもする「さて」とは対照的に、「かくて」が歌の後に用いられていることが注目される。」（同八七頁）と述べ、和歌との位置関係から「カクテ」を考える。また西田（一九九九）は『源氏物語』中の「カクテ」に着目し、『源氏物語』の「葵」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻において「「かくて」は、巻の大段落を区画する徴標として物語の展開上重要な役割を果たしている。」（同八七頁）、「これらの巻で「かくて」以下が導くのは、かなり大きな公のでき事という共通する傾向がある。」（同九七頁）と指摘し、次いで西田（二〇一〇）で、「「かくて」は、それぞれの巻（論者注：「少女」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻）において、結節点ともなる重要なできごとのはじまりを示す文」を導く（同一一〇頁）とし、「カクテ」を、その後で重要な公のでき事を述べる部分に置かれる、物語の文脈の段落を区画する徴標と考えた。

糸井、西田は「カクテ」が物語の文脈の中でどのように機能するかについて示したという点で、「カクテ」についての考察を彼ら以前の研究から一歩進めたと言えよう。しかし、糸井、西田共に、なぜ「カクテ」が「歌の後に用いられている」のか、また、なぜ「カクテ」が「巻の大段落を区画する徴標」として機能し、「カクテ」の後で「かなり大きな公のでき事」が述べられるのかについては示していない。また、論者の調査によれば、両氏の指摘に合わない「カクテ」の例もあり、それらについての説明も必要であるかと考えられる。

そこで本論では糸井（同）と西田（同1、同2）を踏まえ、中古和文物語作品中の「カクテ」と、「カクテ」と同じ指示副詞「カク（カカ）」をその構成要素に有し、文などの関係付けを行う「カカルホドニ」の出現状況をまず示し、その上で二語の用法の差異について、両氏が述べた、歌物語における「カクテ」と歌との位置関係や、『源氏物語』中の諸巻における「カクテ」の機能について確認しつつ述べることとする。なお、本論では「カクテ」と「カカルホドニ」について、論中でも述べたように語構成上の共通部分（指示副詞「カク（カカ）」）があり、文などの関係付けを行うという文中での機能も類似していることから、両形式の差異を見ることがそれぞれの語についての考察に寄与するところが大きいと考えられるため、両語について検討することとする。

三．中古和文物語作品中の「カクテ」と「カカルホドニ」

三．一．各作品における「カクテ」と「カカルホドニ」

三．一．一．「カクテ」と「カカルホドニ」の分類について

まず、中古和文物語作品に見られる「カクテ」と「カカルホドニ」についてそれぞれの用例数を示す。[5] 用例数は地の文と非地の文に分けて示す。非地の文とは、地の文以外の対話文、心内話文、消息文、歌の文を指すものとする。また、用例の検索には国立国語研究所（２０１８）『日本語歴史コーパス』[6]とジャパンナレッジＬｉｂ[7]を用い、その後小学館刊行の『新編日本古典文学全集』で確認した例を考察の対象とした。用例末の頁数は同全集のものである。用例に付した傍線は論者による。

初めに確認できた全用例を先行研究西田（同１）に一部倣い、構文的な条件の違いを考慮してⅠ型からⅣ型に分類して示す。

【Ⅰ型】

「カクテ」や「カカルホドニ」は文中に置かれており、両語の直後に述語用言が後接する型。

（１）〔カクテ〕
男は、さしも思さぬことをだに、情のためにはよく言ひつづけたまふべかめれば、ましておしなべての列には思ひきこえたまはざりし御仲の、かくて背きたまひなんとするを、口惜しうもいとほしうも思しなやむべし。（『源氏物語』賢木、九〇頁）

（２）〔カカルホドニ〕
皇子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ例なきことなれば、まかでたまひなむとす。（『源氏物語』桐壺、二四頁）

【Ⅱ型】

「カクテ」と「カカルホドニ」は文中に置かれており、両語の後に一語以上の語が置かれ、その後に述語用言が後接する型。

（３）〔カクテ〕
大将に聞こえたまへば、「いとよう仰せられたり。ここにかくてわが御ままにておはします。仲忠侍り。」（『うつほ物語』楼の上　上、四三七頁）

（４）〔カカルホドニ〕
該当例なし。

【Ⅲ型】

「カクテ」と「カカルホドニ」は文頭に置かれ、両語の後に［主語（句）＋述語（句）］の構造をもつ節が認められ、なおかつ「カクテ」と「カカルホドニ」に承前性があり、作品本文中の両語で導かれる文よりも前部の文中に「カクテ」と「カカルホドニ」で表されている内容が示されている型。

（5）［カクテ］

たけとりの翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだてて、よごとに、黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。（『竹取物語』、一八頁）

（6）［カカルホドニ］

「かかる君に仕うまつらで、宿世つたなく、悲しきこと、この男にほだされて」とてなむ泣きける。かかるほどに、帝聞しめしつけて、この男をば流しつかはしてければ、」（『伊勢物語』六五段、一六九頁）

【Ⅳ型】

「カクテ」と「カカルホドニ」は文頭に置かれ、両語の後に［主語（句）＋述語（句）］の構造をもつ節が認められ、さらに、「カクテ」と「カカルホドニ」に承前性がなく、作品本文中の両語で導かれる文よりも前部の文中に「カクテ」と「カカルホドニ」で表されている内容が示されていない型。

（7）［カクテ］（この例は「カクテ」の後の主語（句）が省略されている例。）

築地よりはじめて、新しくつきまはして、古き一つまじらず、これを大事にてつくらせたまふ。かくて「今年の賀茂祭いとをかしからむ」と言へば、衛門督の殿、「さうざうしきに、御達に物見せむ」とて、（『落窪物語』巻之二、二〇二頁）《「つくらせたまふ」までの文と「かくて、「今年の」」以降の文に承接関係はない。》

（8）［カカルホドニ］

さながら習ひ取りなどして経たまふほどに、二十一なり。御妻なし、よき人の娘ども奉れども、思ふ心ありて得たまはず。かかるほどに、右近将監清原松方、琴の師、つかさの少将仲頼に、陣にていふほどに、（『うつほ物語』吹上　上、三八一頁）《「得たまはず」までの文と「かかるほどに、右近将監清原松方」以降の文に承接関係はない。》

三．一．二．各型の用例の扱いについて

まず、前項三．一．一．で示した四つの型に分類した用例数を（表1）～（表3）に示す。表では（　）外に用例の合計の実数を示し、（　）内にその内訳を（地の文の用例数、非地の文の用例数）として挙げる。

（表1）「カクテ」の型別用例数[8]

	カクテ				
和文作品名	Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅲ型	Ⅳ型	カクテ合計
『竹取物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)
『伊勢物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)
『土佐日記』	0(0, 0)	0(0, 0)	7(7, 0)	0(0, 0)	7(7, 0)
『大和物語』	5(2, 3)	0(0, 0)	35(35, 0)	0(0, 0)	40(37, 3)
『平中物語』	1(0, 1)	0(0, 0)	4(4, 0)	0(0, 0)	5(4, 1)
『落窪物語』	14(1, 13*)	2(0, 2)	14(14*, 0)	1(1, 0)	31(16, 15)
『うつほ物語』	67(8, 59*)	6(0, 6*)	401(400*, 1)	53(53*, 0)	527(461, 66)
『源氏物語』	94(19, 75*)	11(1, 10)	20(20*, 0)	2(2, 0)	127(42, 85)
型別用例合計	181(30, 151)	19(1, 18)	485(484, 1)	56(56, 0)	741(571, 170)

（表2）「カカルホドニ」の型別用例数

	カカルホドニ				
和文作品名	Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅲ型	Ⅳ型	カカルホドニ合計
『竹取物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	3(3, 0)	0(0, 0)	3(3, 0)
『伊勢物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	1(1, 0)	0(0, 0)	1(1, 0)
『土佐日記』	0(0, 0)	0(0, 0)	0(0, 0)	0(0, 0)	0(0, 0)
『大和物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)
『平中物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)
『落窪物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	4(4, 0)	6(6, 0)
『うつほ物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	94(94, 0)	1(1, 0)	95(95, 0)
『源氏物語』	1(1, 0)	0(0, 0)	4(4, 0)	0(0, 0)	5(5, 0)
型別用例合計	1(1, 0)	0(0, 0)	108(108, 0)	5(5, 0)	114(114, 0)

（表3）「カクテ」と「カカルホドニ」の総合計数

和文作品名	カクテ合計	カカルホドニ合計	総合計
『竹取物語』	2(2, 0)	3(3, 0)	5(5, 0)
『伊勢物語』	2(2, 0)	1(1, 0)	3(3, 0)
『土佐日記』	7(7, 0)	0(0, 0)	7(7, 0)
『大和物語』	40(37, 3)	2(2, 0)	42(39, 3)
『平中物語』	5(4, 1)	2(2, 0)	7(6, 1)
『落窪物語』	31(16, 15)	6(6, 0)	37(22, 15)
『うつほ物語』	527(461, 66)	95(95, 0)	622(556, 66)
『源氏物語』	127(42, 85)	5(5, 0)	132(47, 85)
型別用例合計	741(571, 170)	114(114, 0)	855(685, 170)

※1　「カクテ」、「カカルホドニ」の用例には「カクテナム」、「カカルホドニハ」などの、助詞の付いた形は含めない。

※2　【Ⅲ型】には「カクテ」と「カカルホドニ」の後の主語（句）が省略されている例も含む。
（例）朝には狩にいだしたててやり、夕さりはかへりつつ、そこに来させけり。かくてねむごろにいたつきけり。
（『伊勢物語』六九段（172頁））→【Ⅲ型】に分類する。

※3　頭注の注記などから、他本に「カクテ」の例として確認できないものは数値に含めない。
（具体的には「かくて侍るを。」（『うつほ物語』蔵開下（604頁）：「かくて」→底本「信つゝ」〈同頁頭注〉）と、「限りと見えながらも、かくて生きたるわざなりけり」（『源氏物語』手習（293頁）：「かくて」→「「かくても」とする本もある。」〈同頁頭注〉の2例。

※4　『うつほ物語』の例にはいわゆる「絵詞」の部分の文は含めない。

※5　＊は、「カクテ」の音便形「カウテ」も含む。「カウテ」のみの例は、
『うつほ物語』（Ⅰ型　7(0, 7)　Ⅱ型　1(0, 1)　Ⅲ型　7(7, 0)　Ⅳ型　3(3, 0)，
『落窪物語』（Ⅰ型　1(0, 1)　Ⅱ型　0(0, 0)　Ⅲ型　1(1, 0)　Ⅳ型　0(0, 0)，
『源氏物語』（Ⅰ型　4(0, 4)　Ⅱ型　0(0, 0)　Ⅲ型　1(1, 0)　Ⅳ型　0(0, 0)）である。

ここで、【Ⅰ型】から【Ⅳ型】の各分類について確認しておく。前項三・一・一・で述べたように、【Ⅰ型】及び【Ⅱ型】に分類される〈「カクテ」・「カカルホドニ」〉と〈述語用言〉の関係は、〈修飾語〉と〈被修飾語〉の関係であり、【Ⅲ型】及び【Ⅳ型】に分類される〈「カクテ」・「カカルホドニ」の前部に置かれている文〉と〈「カクテ」・「カカルホドニ」で導かれる文〉の関係は、接続後の〈前部〉と〈後部〉の関係である。

これを踏まえて（表1）、（表2）を見ると、いずれの作品でも「カクテ」、「カカルホドニ」共に【Ⅲ型】の方が【Ⅳ型】より多く見られる。これは、本論で用例採集資料とした中古和文物語作品本文中では、【Ⅲ型】のような「カクテ」や「カカルホドニ」に承前性がある形で接続を行う接続語の方が、【Ⅳ型】のような、「カクテ」や「カカルホドニ」に承前性がなく、機能としてその前後文の接続の関係付けを表す形で接続を行う接続語よりも多く見られることを示している。つまり、いまだ中古期には、「カクテ」と「カカルホドニ」は「カク―」、「カカ―」で表される指示詞としての意味を保持したまま接続語としてはたらいていたと見ることができる。[9]

それを踏まえ、本論は接続語として機能する「カクテ」と「カカルホドニ」の意味、用法の差異を考えることが目的であるので、（表1）、（表2）の【Ⅲ型】、【Ⅳ型】に分類された地の文の用例を考察対象とする。それにあたり、先行研究の糸井（同）は歌物語における「カクテ」に、西田（同1、同2）は『源氏物語』における「カクテ」に着眼して論じていることから、本論でも、まずそれらに注目し、その後に「カカルホドニ」について考察していく。

三・二・歌物語における「カクテ」

糸井（同）は『大和物語』中の「カクテ」に注目し、「歌の直前に用いられもする「さて」とは対照的に、「かくて」が歌の後に用いられていることが注目される。」（同・八七頁）と述べる。まず、この「カクテ」と歌との位置関係を確認する。今、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』中の全「カクテ」の用例と、歌との位置関係を（表4）で示す。

※一　表中の数値はそこに分類される用例数を表す。

※二　歌の前後位置の判断は、「カクテ」で導かれる文を含めその前後の二文以内に歌が置かれているかどうかを判断基準とした。

（例ア）また、【歌―省略】などいひけり。かくて来たりけるを、「いまはかへりね」とやらひければ、【歌―省略】返し、をかしかりけれど、え聞かず。（『大和物語』六五段）→歌の前後の「カクテ」の例とする。

（例イ）返し、【歌―省略】かくて、まことに、この男、ものへいなむと思ひたる気色を見て、（略）せちにのた

まふ。思ひわづらひてながらふるに、（略）いひやる。（『平中物語』一段

→歌の後の「カクテ」の例とする。

（表4）より、用例の数値を比較すると、糸井（同）が述べた歌の後に置かれた「カクテ」よりも、歌の前後に位置したり、歌とは関係なく地の文中に見られる「カクテ」の方が多い。それらを挙げてみる。

［歌の前後の「カクテ」〈（表4）中「歌の前後」に分類された例〉］

（9）むかし、男、京をいかが思ひけむ、東山にすまむと思ひ入りて、【歌―省略】かくて、ものいたく病みて、死に入りたりければ、おもてに水そそきなどして、いきいでて、【歌―省略】となむいひて、いきいでたりける。（『伊勢物語』五九段、一六一頁）

（10）また、箕輪の里といふ駅にて、【歌―省略】とよみて書きつけたりける。かくて、人の国歩きありきて、甲斐の国にいたりてすみけるほどに、病して死ぬとてよみたりける。【歌―省略】とよみてなむ死にける。（『大和物語』一四四段、三六四頁）

（11）返し、【歌―省略】かくてありわたるに、逍遥せまほしかりければ、難波の方へぞいきける。「そのほど、たひらかにものしたまへ。これは、但馬の国より持て来たるたにもかくといふものをやる」とて、【歌・上の句―省略】といひたれば、（『平中物語』九段、四七二頁）

［前後に歌のない「カクテ」〈（表4）中「歌なし」に分類された例〉］

（12）親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には（略）そこに来させけり。かくて、ねむごろにいたつきけり。二日といふ夜、男、（略）といふ。女もはた、（略）思へらず。（『伊勢物語』六九段、一七二頁）

（13）これがもとの妻のもとに、（略）率て来てすゑたりけり。もとの妻も、（略）語らひてゐたりけり。かくてこの男は、ここかしこ人の国がちにのみ歩きければ、ふたりのみなむゐたりける。この筑紫の妻、しのびて男したりける。それを、（略）よみたりける。（『大和物語』一四一段、三五八頁）

（14）この女、「いづちぞ」と（略）いきける。「さりとて、（略）したりける。かくて、物語などあまた、をかしきやうにかたみにいひければ、をかしと思ふ。この男、（略）寺ぞふたがりける。明くるまで、（略）ゆきけり。（『平中物語』二五段、四九四頁）

歌の前後や、歌とは関係ない位置に置かれた「カクテ」の

（表4）

	歌の前	歌の後	歌の前後	歌なし	全用例数
『伊勢物語』	0	0	1	1	2
『大和物語』	4	8	13	10	35
『平中物語』	0	1	1	2	4

用例数が多いというこの状況は、「カクテ」を歌との位置関係から考えるのではなく、別の方向で考えるべきであることを示唆していると思われる。

次に、「カクテ」と動詞の関係を考えてみる。岡崎（二〇〇二）が述べるところによれば、「カクテ」の構成要素である指示副詞の「カク」は、「①上代・中古のカク系列「カク（カウ）」は直示・照応用法[10]であった。「カク（カウ）」は近世以降、コ系「コウ」に変化するが、現代語まで用法は変化しない。②上代・中古にはカク系列「カク（カウ）」は直示用法において、今、目に見える、直接知覚・感覚できるすべての「こと」を指示していたと考えられる。」（同四頁）とある。つまり、「カクテ」を構成する「カク」は中古においては直示・照応用法をもって文中で機能しており、「カクテ」という接続語として文中に置かれることで、「カクテ」以前の文中で示されている内容を「カクテ」で直示、あるいは照応の用法[11]でまとめて「カクテ」以降の文に関係付けているのであり、（表4）に示される「カクテ」もそのような機能をもって文中ではたらいていると考えられる。

歌物語において歌は「一つの語り（単位）において、核心」（糸井（同））であることにまちがいはないと考えられるが、本論で用例の採集資料とした『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』においては、接続語「カクテ」の機能は歌との位置関係に着眼してとらえるよりも、指示副詞「カク」に由来する接続語「カクテ」それ自身の語彙的な機能から考える方がより適切だと思われる。つまり、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』においては、接続語「カクテ」は「カクテ」以前の文中で示されている内容を「カクテ」で直示、あるいは照応の用法でまとめて「カクテ」以降の文に関係付ける機能をもってはたらく。それが歌物語における歌のような感動の山場の後に置かれた場合、歌も含めた物語のそれまでの話をまとめて次の話に関係付ける形式となるために、前出のように糸井（同）の述べる「「かくて」が歌の後に用いられていることが注目される。」（同八七頁）」といった外観となって資料中に表れているのだと考えられる。（表4）より、「カクテ」は歌、地の文の別なく関係付けの機能をもつ。「歌の後に用いられている」「カクテ」は、偶々そのときの話においては文脈上、歌の後に置かれていたものであると考えるのが妥当であると思われる。

三．三．『源氏物語』における「カクテ」

西田（同1）は『源氏物語』の「葵」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻における「「かくて」は、巻の大段落を区画する徴標として物語の展開上重要な役割を果たしている。」（同1、八七頁）、「これらの巻で「かくて」以下が導くのは、かなり大きな公のでき事という共通する傾向がある。」（同1、九七頁）と指摘し、次いで、「「かくて」は、それぞれの巻（論

者注：「少女」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻）において、結節点ともなる重要なできごとのはじまりを示す文」を導く（同2、一一〇頁）とし、「カクテ」を、その後で重要な公のでき事を述べる部分に置かれる、物語の文脈の段落を区画する徴標と考えた。西田は（同1、同2）中で「かなり大きな公のでき事」（同1、九七頁）や「結節点ともなる重要なできごと」（同2、一一〇頁）の内容について明らかにしてはいないので、何をもってそれが「かなり大きな公のでき事」、「結節点ともなる重要なできごと」と判断しているのかは不明である。そこでまず確認のために、西田が（同1）、（同2）中でこれに該当すると判断した「カクテ」の例を挙げてみる。[12] なお、西田は（同1）中で、『源氏物語大成』の索引を使い、そこで接続詞として用いられている「カクテ」と副詞として用いられている「カクテ」を区別して用例として挙げている。しかし、副詞の「カクテ」の例として挙げられているものの中には、本論では三・一・一・で【Ⅲ型】として分類し、【Ⅳ型】と共に文中で接続語としてはたらくと考えたものも含まれているので、本論では『源氏物語大成』の索引で接続詞の「カクテ」の例としているものは（例番号）として、副詞の「カクテ」の例としているものは（例番号）として以下にその例を挙げることとする。例中には「カクテ」の音便形の「カウテ」の例も含む。なお、西田が挙げた例については本論で挙げた例と区別するために、漢数字で示す。傍線は論者による。

（例一）「かの人もいかに思ひつらむ」とささめきあへり。かくて後は、内裏にも院にも、（略）あやしの心やと我ながら思さる。（『源氏物語』葵、七五頁）

（例二）ここにも、かかることいかで漏らさじとつつみて、御使ことごとしうもてなさぬを、胸いたく思へり。かくて後は、忍びつつ時々おはす。（『源氏物語』明石、二五八頁）

（例三）すべて何ごとにつけても、道々の人の才のほど現るる世になむありける。かくて、后ゐたまふべきを、「斎宮の女御をこそは、母宮も御後見と譲りきこえたまひしかば」と大臣もことつけたまふ。（『源氏物語』少女、三〇頁）

（例四）老いもておはするままに、さがなさもまさりて、院もくらべ苦しうたへがたくぞ思ひきこえたまひける。かくて大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。（『源氏物語』少女、七六頁）

（例五）いとどところせき心地して、置き所なきもの思ひつきて、いとなやましうさへしたまふ。かくて、事の心知る人は少なうて、疎きも親しきも、無下の親ざまに思ひきこえたるを、（略）よろづに安げなう思し乱る。（『源氏物語』胡蝶、一九一頁）

（例六）大臣の君の思しよりてのたまふことを、（略）、をかしうもありなむかしとぞ思ひよりたまうける。かうて野にお

はしまし着きて、（略）、六条院より、御酒、御くだものなど奉らせたまへり。（『源氏物語』行幸、二九二頁）

（例七）親と聞こえながらもありがたからむをと思すものから、いとなむうれしかりける。かくて後は、中将の君にも、忍びてかかる事の心のたまひ知らせけり。（『源氏物語』行幸、三一一頁）

（例八）されど、あるまじう、ねぢけたるべきほどなりけりと思ひ返すことこそは、ありがたきまめまめしさなめれ。かくてその日になりて、三条宮より忍びやかに御使あり。（『源氏物語』行幸、三一二頁）

（例九）げに宮仕の筋にて、けざやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひよりたまひけるかなとむくつけく思さる。かくて御服など脱ぎたまひて、「月立たば～十月ばかりに」と思しのたまふを、内裏にも心もとなく聞こしめし、聞こえたまふ人々は、誰も誰もいと口惜しくて、（『源氏物語』藤袴、三三八頁）

（例一〇）次々の君たちにも、ことごとしからぬさまに、細長、小袿などかづけたまふ。かくて、西の殿に戌の刻に渡りたまふ。（『源氏物語』梅枝、四一二頁）

（例一一）按察の北の方なども、かかる方にてうれしと思ひきこえたまひけり。かくて六条院の御いそぎは、二十余日のほどなりけり。（『源氏物語』藤裏葉、四四六頁）

（例一二）なほこの内侍にぞ、思ひ離れず這ひ紛れたまふべき。かくて、御参りは北の方添ひたまふべきを、常にながながしうはえ添ひさぶらひたまはじ、かかるついでに、かの御後見をや添へまし、と思す。（『源氏物語』藤裏葉、四四九頁）

（例一三）尚侍の君も、（略）かく世に住みはてたまふにつけても、おろかならず思ひきこえたまひけり。かくて二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ。（『源氏物語』若菜上、六一頁）

（例一四）なほ、かの下の心忘られず、小侍従といふかたらひ人は、宮の御侍従の乳母のむすめなりけり、（略）かかる思ひもつきそめたるなりけり。かくて、院も離れおはしますほど、人目少なくしめやかならむを推しはかりて、小侍従を迎へとりつつ、いみじう語らふ。（『源氏物語』若菜下、二一八頁）

（例一五）御褥、上蓆、屏風、几帳などのことも、いと忍びて、わざとがましくいそがせたまひけり。かくて、山の帝の御賀も延びて、秋とありしを、（『源氏物語』若菜下、二六六頁）

（例一六）かばかりのすくよけ心に思ひそめてんこと、諫めむにかなはじ、用ゐざらむものから、我さかしに言出でむもあいなし、と思してやみぬ。かくて、御法事に、よろづとりもちてせさせたまふ。（『源氏物語』夕霧、四五九頁）

（例一七）この君の御宿世にて、年ごろ申したまひしは難きなりけりと見えたり。かくて、心やすくて内裏住みもしたまへかしと思すにも、いとほしう、（略）と思しあつかふ。（『源

氏物語』竹河、一〇二頁）

（例一八）三条殿腹の大君を、春宮に参らせたまへるよりも、この御事をば、ことに思ひおきてきこえたまへるも、宮の御おぼえありさまからなめり。かくて後、二条院に、え心やすく渡りたまはず。（『源氏物語』宿木、四二一頁）

（例一九）いとほしの人ならはしやとぞ。かくて、なほ、いかでうしろやすくおとなしき人にてやみなんと思ふにも従はず、心にかかりて苦しければ、（『源氏物語』宿木、四四三頁）

（例二〇）いといたくわづらひたまへば、后の宮よりも御とぶらひあり。かくて三年になりぬれど、一ところの御心ざしこそおろかならね、（略）御とぶらひども聞こえたまひける。（『源氏物語』宿木、四七〇頁）

（例二一）大将殿は、かくさへ（略）、と思ふは口惜しけれど、また、はじめの心おきてを思ふにはいとうれしくもあり。かくて、その月の二十日あまりにぞ、藤壺の宮の御裳着のことありて、またの日なん大将参りたまひける夜のことは忍びたるさまなり。（『源氏物語』宿木、四七四頁）

（例二二）三日の夜は、大蔵卿よりはじめて、（略）、舎人まで禄賜す。そのほどのことどもは、私事のやうにぞありける。かくて後は、忍び忍びに参りたまふ。（『源氏物語』宿木、四七六頁）

（例二三）御送りの上達部、殿上人、六位など、言ふ限りなききよらを尽くさせたまへり。かくて心やすくうちとけて見たてまつりたまふに、いとをかしげにおはす。（『源氏物語』宿木、四八六頁）

（例二四）母君は、すこしもののゆゑ知りて、いと見苦しと思へば、ことにあへしらはぬを、「あこをば思ひおとしたまへり」と、常に恨みけり。かくて、かの少将、契りしほどを待ちつけで、（略）、近う呼び寄せて語らふ。（『源氏物語』東屋、二二頁）

西田が挙げたこれらの全二十四例について、「カクテ」の後で述べられている出来事を用例の番号と共に（表5）に示す。

（表5）

出来事	用例番号
入内、立后	三（梅壺女御が中宮になる）、一一（明石の姫君の入内決定）、一二（明石の姫君の入内に際し明石の君を後見役にする）
昇進、裳着	四（夕霧の進士及第）、八（玉鬘の裳着）、一〇（明石の姫君の裳着）、二一（女二の宮の裳着と薫が婿となることの決定）
夫婦関係の開始	一（源氏と紫の上）、二（源氏と明石の君）、一三（源氏と女三の宮）、二二（薫と女二の宮の結婚）、二三（薫、女二の宮を自邸三条邸に迎える）、

その他	五（源氏に迫られた玉鬘の苦悩、玉鬘の求婚者等の様子）、六（冷泉帝の大原野行幸）、七（玉鬘の裳着の準備と玉鬘の素性を知った夕霧の心情）、九（玉鬘の出仕決定）、一四（柏木、女三の宮をあきらめきれず、小侍従に訴える）、一五（朱雀院の御賀の延期）、一六（夕霧が落ち葉の宮の母、一条御息所の法事を主宰）、一七（髭黒と玉鬘の娘の中の君が尚侍として出仕）、一八（中の君の、匂宮の夜離れに対する嘆き）、一九（中の君の、薫の態度への懊悩）、二〇（中の君の出産の兆し）、二四（少将、浮舟が実子でないことを知る）

（表5）を基に、「カクテ」の後で述べられている出来事を確認する。出来事の項目は、「カクテ」の後の文の内容によって「入内、立后」、「昇進、裳着」、「夫婦関係の開始」、「その他」に分けることができる。まずその項目について見た後に、各項目に分類された用例を一つずつ確認していくこととする。

「入内、立后」と「昇進、裳着」については西田が述べる「かなり大きな公のでき事」（同1、九七頁）や「結節点ともなる重要なできごと」（同2、一一〇頁）とまずは考えてもよいのかもしれない。しかし、「夫婦関係の開始」、「その他」については、これをして「公のでき事」、「重要なできごと」と考えてよいかどうかは即断できない。そこで用例を一つずつ見ていくこととする。

「入内、立后」の項目の用例番号三は梅壺女御の中宮立后、一一は明石の姫君の入内なので、これらを公事と考えるのは問題がないかと思われるが、一二の明石の姫君の入内に際し、実母の明石の君を後見役とすることについては、公事と言うよりは源氏一家の問題のように思われる。

「昇進、裳着」の項目の用例番号四の夕霧の進士及第は、朱雀院行幸という公の場での詩文作成の評価を夕霧が得、これを機に秋の司召で五位に昇叙され、侍従の官職に就いているので公事についての内容と考えて良いかと思われるが、八の玉蔓、一〇の明石の姫君の裳着については、自家の女子の成人の儀式であると同時に、結婚可能な女子の存在を周囲に知らしめる意味も持っていたという対社会的な意味ももっていたという意味でこれを公事と見る考え方もあろうが、「公」性をどこに認めるかという点でいささか疑問を感じる余地もあろう。先の用例番号四の夕霧の進士及第のような、公の官職を得た内容のような朝廷社会における位置や認識の変化や相違がここには認めがたいからである。二一の女二宮の裳着と薫が婿になることの決定については、女二の宮の裳着の翌日に行われた結婚により薫は帝の婿になったわけなので、ここにある程度の公的な性格は見て良い可能性もあると思われる。

公的性質の有無について疑問になってくるのはこれ以降の内容である。「夫婦関係の開始」の項目の用例番号一の源氏

と紫の上の結婚、二の源氏と明石の君の結婚については、公的性質があると見て良いのだろうか。一で源氏は紫の上と結婚し惟光に三日夜餅の準備を命じる。源氏自身の命令なので、紫の上との新たな関係について、源氏の側に明確にこれが結婚であるとの意識があることが確認できるが、これに公的性質を認めても良いものだろうか。さらに二の源氏と明石の君との結婚については、確かに明石の君の父、入道に勧められ、認められた結婚ではあるものの、ここには先の一で見たような紫の上との結婚において見られた結婚後の儀式等の描写はなく、明石の君は源氏の帰京には伴われない。物語後半で描かれる明石一族の繁栄もこの時点ではいまだ明らかではなく、ここで描かれている結婚は源氏の私的な結婚であって、ここに公的性格を見るのは少し難しいかと思われる。一三の源氏と女三宮の結婚は女三の宮の父の朱雀院から源氏に内意があり、源氏がそれを承引したものであるので、これは公的なものと見て良いかと考えられる。また、二二の薫と女二の宮との結婚は、前述したように薫が帝の婿となる結婚であること、さらに二三の薫が妻の女二の宮を自邸の三条邸に迎えることは、藤花の宴の翌日の夜に行われた儀式を伴うものであり、物語での描写のされ方を考えても、これらは公的なものと見て良いかと思われる。

その他の項目の用例を見ると、前述のように用例番号六の冷泉帝の大原野行幸、九の玉蔓の出仕決定、一五の朱雀院の御賀の延期、一六の夕霧による一条御息所の法事の主催、一七の玉蔓の娘の中の君の尚侍としての出仕については公的性格のものと見られる可能性があるが、用例番号五の源氏に迫られた玉鬘の苦悩と玉鬘の求婚者等の様子、七の玉鬘の裳着の準備と玉鬘の素性を知った夕霧の心情、一四の柏木が女三の宮をあきらめきれず、小侍従に訴える描写、一八の中の君の、匂宮の夜離れに対する嘆き、一九の中の君の、薫の態度への懊悩、二〇の中の君の出産の兆し、二四の少将、浮舟が実子でないことを知る描写といった内容については公的性格を求めがたいと思われる。

西田（同1）は『源氏物語』の「葵」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻における「「かくて」は、巻の大段落を区画する徴標として物語の展開上重要な役割を果たしている。」（同1、八七頁）根拠として「これらの巻で「かくて」以下が導くのは、かなり大きな公のでき事という共通する傾向がある。」（同1、九七頁）と指摘し、次いで西田（同2）で、「「かくて」は、それぞれの巻（論者注：「少女」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻）において、結節点ともなる重要なできごとのはじまりを示す文」を導く（同2、一一〇頁）とするが、「葵」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」に見られる例を見ると、「葵」の例が用例番号一、「藤裏葉」の例が一一、一二、「若菜上」の例が一三、「若菜下」の例が一四、一五である。（表5）と本論の前述部分から確認すると、この中で

公的性格を持つ物語の内容の例は「藤裏葉」の一一（明石の姫君の入内）、「若菜上」の一三（源氏と女三の宮との結婚）、「若菜下」の一五（朱雀院の御賀の延期）の例であり、その他の「葵」の一（源氏と紫の上の結婚）、「藤裏葉」の一二（明石の姫君の入内に際し、明石の君が後見となること）、「若菜下」の一四（柏木が女三の宮をあきらめきれず小侍従に訴えること）の例については、「かなり大きな公のでき事」（同1、九七頁）と考えることに躊躇を感じるものである。

また西田は、「「かくて」は、それぞれの巻（論者注：「少女」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻）において、結節点ともなる重要なできごとのはじまりを示す文」を導く（同2、一一〇頁）とも述べるが、それでは、『源氏物語』の同類の例では、「結節点」を示す語として「カクテ」は使用されているのだろうか。確認を行う。西田が挙げている「少女」に見られる例を確認すると、用例番号三は梅壺女御が立后して中宮となる内容、四は夕霧が進士に及第するという内容である。これらは確かに西田の言うように「結節点ともなる重要なできごと」であると（表5）の分類においても考えられるが、「紅葉賀」で藤壺は立后し中宮になり、源氏も宰相となるが、この部分の本文は「この御仲どものいどみこそ、あやしかりしか。されどうるさくてなむ。七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。」（『源氏物語』紅葉賀、三四七頁）であり[13]、本文中に「カクテ」は用いられていない。また、「若菜上」には夕霧の右大将昇進の部分の本文があるが、ここには「内裏には、思しそめてしことどもをむげにやはとて、中納言にぞつけさせたまひてける。そのころの右大将病して辞したまひけるを、この中納言に御賀のほどよろこび加へむと思しめして、にはかになさせたまひつ。」（『源氏物語』若菜上、九八～九九頁）とあり、ここでも「カクテ」は使われていない。つまり、西田が挙げた、「かなり大きな公のでき事」（同1、九七頁）、「結節点ともなる重要なできごとのはじまりを示す」（同2、一一〇頁）という論は前述したように、その「かなり大きな公のでき事」の範囲が明確でなく、また西田本人が挙げた例に鑑みて考えてみても、同様の「かなり大きな公のでき事」である立后や昇進の本文内容を導く際に「カクテ」を用いずに本文が表されているという事実が確認できる。さらに西田が挙げた巻々での公的性質があると考えられる出来事を見ると、「葵」での新斎院御禊の日の物見で、葵の上と六条御息所が車の立所を巡り争いが生じたこと、「少女」での源氏の内大臣が太政大臣に、右大将（元頭中将）が内大臣に昇進したこと、「藤裏葉」では源氏が准太上天皇となり御封が増加、年官、年爵が加わること、また、内大臣が太政大臣に、さらに宰相中将（夕霧）が中納言に昇進すること、「若菜上」での夕霧が右大将に昇進すること、「若菜下」での朱雀院の五十の賀が催されることなど、「カクテ」を置かずに「大きな公のでき事」、「重要なできごと」が表さ

れている例もあることから、前出の西田の主張を論拠とする「「かくて」は、巻の大段落を区画する徴標として物語の展開上重要な役割を果たしている。」（同1、八七頁）という主張は再考を要すると思われる。[14] 確かに一見「カクテ」の後で公的性格をもった内容の文が続いているように見えるが、ここで見てきたように、「カクテ」以降に公的性格をもたない内容がくる場合も見られること、また、「カクテ」を置かずに公的性格をもつ内容の文が続く場合も見られることから、「カクテ」が物語の公的内容を導く「徴標」的にはたらくというのは物語の内容を見たときに「カクテ」で導かれる文の例中の一部について結果的にそう見える例もあるということであり、さらに考える余地があると思われる。

三．四．「カクテ」と「カカルホドニ」

三．四．一．「テ」と「ホドニ」

前項までで、物語中の歌や、「重大なでき事」とは別に「カクテ」や「カカルホドニ」を考えることの有効性を確認した。ここでは三．二．と三．三．を踏まえ、再び中古和文物語作品における「カクテ」と「カカルホドニ」を考えてみる。

そこで「カクテ」、「カカルホドニ」の指示詞部分に後接する「テ」、「ホドニ」に注目してみたい。

まず「テ」は完了の助動詞「ツ」の連用形から発達し、その元の助動詞の意味から時間的継続関係や完了、確認などの意味を表し、叙述を展開する場合に用いる。[15] また、此島（一九五八）は「テ」と「シテ」を比較し、上代から中古にかけての仮名文は日常語に近い口語的なもので、ここでは「テ」が「シテ」よりも優勢であったことを述べている。[16] これらからすると、助詞「テ」は元来その意味が、時間的な継起関係を表すものであったことが確認できる。

「テ」について山口（一九八〇）は「「て」の接続表現における最も基本的な意味関係は並列性であり、継起性・共存性も、そのうちどちらかが常に並列性と両立する点で、並列性の関係に次いで基本的であるといえる。」（二六八頁）と述べた上で、「「て」で示される最も基本的な意味関係は並列性の関係だと述べたが、二つの事態をただ並列するというのは、現実においてさまざまな意味関係にある事態の間に与えられる関係づけとしては、最も消極的・非限定的なものでしかない。継起性・共存性にしても、それらが時間的と空間的という意味で対照的な関係であるだけに、その識別はすでに文脈に対応する現実の脈絡に依存していると考えてよい。」（二六八～二六九頁）とする。このように、指示詞の「カク」に、山口が述べるような「文脈に対応する現実の脈絡に依存」する形で継起関係を表す「テ」を接続させた「カクテ」は、時間の流れに沿う形で物語の文脈を展開させるのに適した接続語であるといえよう。

また、「ホドニ」については、望月（一九六九）が時間から必然条件表現へという通時的な意味変化を、小林（一九七三）が「トコロデ」、「ニヨッテ」などの他形式との相違を、吉田（二〇〇〇）が意味変化が生じた理由を述べた。さらに竹内（二〇〇六）はこの「ホドニ」の意味変化について語用論的視点から説明を行った。

このような先行研究中で、「ホドニ」の意味について最も着目したのは前出の望月（一九六九）である。望月は「ホドニ」の「ホド」が奈良時代は「ホト」として時を表し、その後「徐々に動いていく時間・時の経過・時の推移をいう」（三五頁）とした。また『風土記』や『日本霊異記』中の例を挙げ、そこに「時の経過を原義とするホトが、時間的な意味から空間的な意味へ、意味を広げていく過程に位置する用法」（三五頁）が確認できるとし、それが平安時代には「年齢や愛情の深さなど、時の経過につれて徐々に変化をするものについて、変化の程度をいい、更に広がって、時の経過にかかわりなく、物事一般の程度が、あるものと同等であることをもいうようになった。」（三六頁）として、さらに「時の経過の意から転じて、変化の様子・具合」（三六頁）や「程度の意」（三六頁）を表すようになり、「『源氏物語』では、時間・空間・程度・様子の各意味分野において、新たに意味の展開がみられ、更に、接続助詞的用法も確立して、ホドの用法は、大幅に広がった。」（三六頁）とする。さらに「ニ」については塚原（一九五八）や奥村（一九六七）によって、活用語の連体形に接続し、本来格助詞であるが接続助詞に転じたことが述べられている。[17] つまり、「ホドニ」は、実質的な時間、空間から抽象的な程度、様子を表す「ホド（ホト）」と、体言や活用語の連体形に接続する助詞「ニ」（元来は格助詞であるが、接続助詞に転じた）が接続して成った語であるとしてよいと考えられる。

つまり、「カクテ」、「カカルホドニ」は共に時間とのかかわりが深い語であるということが確認できると思われる。それを踏まえ、次項以降では「カクテ」と「カカルホドニ」によって、時間の情報が物語の文中でどのように表されているかを見ていく。次の三．四．二．～三．四．四．の項では、この「カクテ」と「カカルホドニ」よって可能となる具体的、直接的な指示が《日付》、《各巻の冒頭》、《絵詞》に注目することでどのように物語中に見られるかを確認したい。

三．四．二．「カクテ」と《日付》

古代中国では、記録と暦は不可分の間柄であった。一方、日本の場合、その修史機構については「令」の規定によれば、所管は中務省であるが、宮中の図書の保管、国史の編纂などは図書寮の任務であり、「「令」の篇目で、諸規定を集めた「雑令題三〇」を見ると、そこには（略）「吉気」たる「徴祥」、「妖気」たる「災異」があれば、陰陽寮はこれを報告し、これを

季、すなわち春夏秋冬の三か月ごとに記録をまとめて中務省に送る。（略）「雑令」には、記録の根本たる「暦」もまた陰陽寮が毎年これを作成し、一一月一日中務省にこれを送り、中務省は天皇に直接奏聞することが具体的に規定されている。そもそもこのような「暦」が「国史」の基礎となっていたのである。」（一六六～一六八頁）とあり、記録と暦が深くかかわっていたことが分かる。これらより、上代の『古事記』、『日本書紀』にも認められるように、日本語の文学は、内容を記録的に記載するものを、その一つの原始的な書き方と見て良いように思われる。

（表6）で『うつほ物語』中の《日付》と共起している[18]「カクテ」、「カカルホドニ」を確認してみると、（表6）

全「カクテ」例	全「カカルホドニ」例
四四三例[19]	九五例[20]
内《日付》と共起例	内《日付》と共起例
四二例	一一例

「カクテ」は約9・5％、「カカルホドニ」は約11・6％あり、共に一割前後の「カクテ」と「カカルホドニ」が《日付》と共起していることが分かる。特に「カクテ」については、「かくて、この子、十二になりぬ。」（『うつほ物語』俊蔭、八二頁）、「かくて、その年は立ち去りもしたまはず。」（『うつほ物語』蔵開上、三三二頁）、「かくて、またの日の昼つ方になりて、御乳付け帰りたまふ。」（『うつほ物語』蔵開上、三八九頁）、「かくて、夕暮れになりぬ。」（『うつほ物語』国譲上、一二二頁）など、月日が明示されているわけではないが、時間の推移を示す語と共起している例も見られる。

鈴木（一九八七）は稲作から発生した年中行事が中国的な行事と結びつき、宮廷での年中行事に結び付いた経緯を述べているが、ここで「年中行事は（略）何よりも政治的な恒例行事なのであった。つまり、その基本の理念としては、人心を、年時の節目節目に秩序づけることを通して、掌握しようという論理に貫かれている。」と述べる[21]。『うつほ物語』で繰り返し描かれる諸行事、諸儀式は、「カクテ」や「カカルホドニ」で導かれた《日付》と共に「年時の節目節目に秩序づけ」られて物語の中に位置付けられているのだと考えられよう。

三．四．三．「カクテ」と《各巻の冒頭》

次に、「カクテ」と『うつほ物語』の巻の冒頭の関係に注目したい。『うつほ物語』は全二〇巻から成るが、次の（表7）は、各巻の冒頭部分である。

（表7）

巻名	冒頭部
俊蔭	むかし、式部大輔左大弁かけて、清原の王ありけり。
藤原の君	むかし、藤原の君と聞こゆる一世の源氏おはしましけり。
忠こそ	かくて、また、嵯峨の御時に、源忠経と聞こゆる左大臣おはしけり。
春日詣	かかるほどに、年月過ぎて、その時の帝も下り居たまひ、～
嵯峨の院	かくて、右大将殿に還饗したまひければ、例のごとなむ、左大将もおはしける。
吹上　上	かくて、紀伊国牟婁郡に、神南備種松といふ長者、限りなき～
祭の使	かくて、殿より祭の使出で立ちたまふ。
吹上　下	かくて、八月中の十日のほどに、帝、花の宴したまふ。
菊の宴	かくて、霜月のついたちごろ、残れる菊の宴聞こしめしけるに、～
あて宮	かくて、あて宮、東宮に参りたまふこと、十月五日と定まりぬ。
内侍のかみ	かくて、七月ついたち、うちの帝、仁寿殿の、大将の御息所の～
沖つ白波	六月ばかりに、内裏の帝、仁寿殿に渡りたまひて、大将の女御の君と～
蔵開　上	藤中納言は、衛門督なれど、装束清らにせずとて、非違の別当はかけず。
蔵開　中	かくて、一、二日ありて、大将殿、内裏の仰せられし書ども持たせて～
蔵開　下	かかるほどに、平中納言、藤大納言、藤宰相などおはしたり。
国譲　上	右の大殿には、御婿の殿ばら、宮ばら、御子どもも、上達部に～
国譲　中	かうて、今日は左の大殿の大饗、やがてこの御方の御前にて、～
国譲　下	かくて、中宮より、太政大臣に、「その日の夜さり、聞こゆべきこと～
楼の上上	三条右大臣殿の、かの一条殿の対どもに居たまへりし御方々、宮～
楼の上下	かくて、つとめての御台、ここにて参らせたまひて、とばかり～

※「カクテ」・「カウテ」に傍線、「カカルホドニ」に点線を付す。

（表7）より、『うつほ物語』の全二〇巻中、「カクテ」で始まる巻が一二巻（うち一巻は「カウテ」で始まる。）、「カカルホドニ」で始まる巻が二巻あり、両方を合わせると一四の巻の冒頭部が「カクテ」・「カウテ」、「カカルホドニ」で始まっている。特に上下、または上中下がある巻（「吹上」、「蔵開」、「国譲」、「楼の上」）については、中巻、下巻のような上巻に続く巻は必ず「カクテ」・「カウテ」、「カカルホドニ」で始まる冒頭部を持っており、物語の各巻の始まりと「カクテ」や「カカルホドニ」の相関性が観察できる。[22]

これについて糸井（一九八七）は「「かくて」が同一人物のエピソードを重ねて長編化して語るときに用いられた様子が窺えたのだが、その典型が「宇津保物語」であり、」（八八頁）と述べ、中野（一九八一）は「『うつほ物語』において、「かくて」「かかるほどに」等の接続語の極端な多用が、場面の連続による長編形成に際しての強い承接意識の表われである」（三四三頁）とし、物語で「カクテ」と「カカルホドニ」によって話が導かれる場合が多いのは、「やはり場面の連続を意図した長編形成のための稚拙で強引な初期の方法の表われであろう。」（三四三頁）と述べた。前述したように中古期の「カクテ」や「カカルホドニ」は、その前文脈に「カク（カカ）」で指示される内容が存在していることから指示のしかたが実際的、具体的なものであると考えられ、「カクテ」や「カカルホドニ」を接続語として用いることで、物語の前文脈の内容如何によらずそれに連接的に後文脈を関係付けていくことができる。また、そのような手段をもって物語の話を長編としていくことを可能としたと考えられる。

三．四．四．「カクテ」と《絵詞》

次に、「カクテ」と『うつほ物語』の《絵詞》の関係に注目したい。『うつほ物語』には、《絵詞》と呼ばれる物語の本文とは異質な文が見られる。[23] そしてその詞文が何を表しているのかはいまだ解明されておらず定説を見ない。この《絵詞》に関しては、「もと画面の中に書きこまれてあった説明書きであろう」という説と、この部分について「今一度、もとの物語本文に返して、それらを〈複本文〉という観点から読み直す」べきであるという二つの見方があるようである。つまり、《絵詞》について、絵の説明書きとする見方と、別の観点による本文と見る見方があるわけであるが、今ここで、『うつほ物語』の《絵詞》の文に続く本文の始まりの部分に注目してみたい。

次の（表8）は、《絵詞》の直後の物語本文の始まりの部分である。

（表8）

巻名	絵詞の数	《絵詞》直後の物語本文
俊蔭	2	かくて後（のち）1、国々の荘より1、
藤原の君	11	かくて8、かくて、また1、かかることを1、太宰の前の帥1、
忠こそ	4	かくて4、
春日詣	1	夕暮れのほど1、
嵯峨の院	26	かくて10、かくてあるほどに1、かくて内より1、かくてあり経るほどに1、かくのみ1、かかるほどに4、御物語のついでに1、少将、義則1、御神楽の日1、御仏名果てて1、ここは政所1、仲頼、帰る空もなくて1、つとめて、父ぬし1、大将殿には1、
吹上　上	6	かくて2、かかるほどに1、三月中の十日ばかりに1、三月つごもりになりぬれば1、そこより守のぬし1、
祭の使	3	かくて2、かかるほどに1、
吹上　下	1	かくて1、
菊の宴	3	かくて2、かかるほどに1、
あて宮	7	かくて4、大将のおとど1、源少将は1、宰相も1、
内侍のかみ	6（※一）	かくて3、右大将は1、その日ごろは1、上、こなたに入りたまひて1、
沖つ白波	4（※二）	かくて4、
蔵開　上	8	かくて5、かかることを1、また、女御の君1、おとど参りたまひて1、
蔵開　中	4	かくて3、午の時ばかりに1、
蔵開　下	12	かくて10、司召には1、次の日、はた1、
国譲　上	5（※三）	かくて3、かうて1、また、九日の夜は1、
国譲　中	7	かくて7、
国譲　下	18（※四）	かくて14、かうて1、かくてまた1、かく歩き始めたまひてぞ1、后の宮、聞こしめして1、
楼の上　上	1	酉の時なり1、
楼の上　下	2	大将、内裏よりも1、雪、夜よりいと高う降りて1、

（※一）《絵詞》後の錯簡孤立文中の一六頁九行目「まかなひにも渡らせたまへりき。」一例、一七六頁七行目「かかるほどに」（「底本では一丁表一行目のはじめにあたる。」・一七六頁頭注より引用。）一例は含めず。

（※二）《絵詞》で巻が終わるため、次巻「蔵開上」の冒頭の「藤中納言は」一例は含めず。
（※三）《絵詞》で巻が終わるため、次巻「国譲中」の冒頭の「かうて」一例は含めず。
（※四）《絵詞》で巻が終わるため、次巻「楼の上上」の冒頭の「三条右大臣殿の」一例は含めず。

右は（表8）中の「絵詞の数」が各巻中の《絵詞》の数を、「《絵詞》直後の物語本文」の後の数が、そのように始まっている本文の数を表す。ここで問題とする『うつほ物語』中の《絵詞》は131あり、そのうち、《絵詞》直後の物語本文が「カクテ」（「カウテ」含む。以下同。）で始まる文は90、「カカルホドニ」で始まる文は7あり、合計97となる。[24] 約74・0％の《絵詞》直後の本文が「カクテ」または「カカルホドニ」で始まっていることになるが、本論がこれまで論じてきた「カクテ」、「カカルホドニ」はその前部にある物語中の存在事態や話の内容を直接的、具体的に指示するものであるとする考えによれば、《絵詞》の直後の物語の本文が「カクテ」、「カカルホドニ」で始まっていることは、その本文が《絵詞》と直接的に関係付けられていることを意味すると思われる。前述の、《絵詞》についての二つの見方について、《絵詞》直後の物語本文の始まりに置かれた「カクテ」、「カカルホドニ」という接続語から考えてみると、《絵詞》と《絵詞》直後の物語本文に接続関係が認められることから、《絵詞》は一つの物語本文と見なしてよい部分であると考えることが可能であると思われる。さらに、その内容が絵の説明であることも事実であることから、この部分を絵の説明書きとする考え方も有効なのであり、つまりこれは、物語の本文、絵、《絵詞》全てを指して「物語」であるとし、『うつほ物語』が言語と絵画によって成る一つの作品であると考えることで融和的に理解して良い可能性を示唆しているとも考えられる。

前述したように、《絵詞》については、誰の手によるものであるか、またいつ成立したものかという議論がなされ、確定的な説はいまだ見られない。[25] しかし、「カクテ」と「カカルホドニ」に注目すると、《絵詞》とその後の物語本文との接続関係が認められ、《絵詞》の詞文と物語本文を連続的なものとする見方が肯首される可能性も開けてくるかと思われる。

以上三．四．二．～三．四．四．の項で述べた、《日付》と共起する、また、『うつほ物語』の各巻の冒頭の文や《絵詞》の文に見られる「カクテ」や「カカルホドニ」の接続語としての機能は、三．四．一．の項の末で述べた、「カクテ」や「カカルホドニ」によってこそ可能である具体的、直接的な指示が反映されたものであると言えよう。それを踏まえ、次項で「カクテ」と「カカルホドニ」の意味、用法の差異を示したい。

三．四．五．「カクテ」と「カカルホドニ」の意味・用法

これまでに述べたように、「カクテ」と「カカルホドニ」は共に時間とのかかわりが深く、その構成要素である「カク（カカ）」によって、それが置かれている前部で述べられている事態、内容を実際的、具体的に指示している。つまり両語の意味、用法の差異は、「テ」と「ホドニ」の差異と考えて良いと考えられる。三．四．一．において述べたように、「テ」は時間の継起性を表し、「ホドニ」は時間の経過性、推移性を表しており、これにより時間とのかかわり方が両語は異なり、「カクテ」と「カカルホドニ」の差異は時間の変化を何に注目して表しているかの差異にあると考えられる。両語が共に時間の流れに沿う形で物語の文脈を展開させるのに適した接続語であり、中古和文物語作品中で多用されるのもこの点に因るのであると考えられる。つまり、「カクテ」は「カクテ」の前部に表されている事態、内容を踏まえ、それらをまとめて総括的に「カクテ」の後部に関係付ける形の接続を行い、「カカルホドニ」は「カカルホドニ」の前部に表されている事態、内容を指しながら、それらを流れる時間の中に配して「カカルホドニ」の後部に関係付ける形の接続を行うという接続の型の差異があり、その差異は、両語それぞれの構成要素である「テ」と「ホドニ」の意味と機能に求められると考えられるのである。

故に、「カクテ」は

(15) 伊勢の君、「遊びの者どもは、えや見たばざらむ。末に和歌を詠まむやは」などのたまふ。かくて、その夜になりぬ。（『うつほ物語』菊の宴、二八頁）

(16) 男皇子たちも、さまざまにいかめしうしたまへり。攤打ち、物かづきなどしたまふ。かくて、六日になりぬ。（『うつほ物語』蔵開　上、三四九頁）

などと時間の流れの中で継起的に生じた事態や出来事を表すのに用いられ、「カカルホドニ」は

(17)「乳を飲まずは、いかがせむ」といへば、「いな、今はな飲ませたまひそ」とて、飲まずなりぬ。かかるほどに、この子は、すくすくと弾き伸ぶるもののやうに大きになりぬ。（『うつほ物語』俊蔭、七一頁）

のように一語で数年の経過を表したり、

(18) かく大いなるわざをして待ちわたりたまふほどに、忠こそを恋ひ死にに隠れたまひぬ。かかるほどに、年月過ぎて、その時の帝も下り居たまひ、東宮国しりたまひて、年ごろ世の中平らかに、国栄えてあり。（『うつほ物語』春日詣、二五七頁）

(19) 東宮、【歌―省略】とのたまふ。あて宮、寝たまへるやうにて、ものも聞こえたまはず。かかるほどに、妊じたまひぬ。（『うつほ物語』あて宮、一二九頁）

などのように、時の経過、推移の中に事態や出来事を配する形で表していくのに用いられる。

このように時間とのかかわりの中で物語を表していくことについて、野口元大（一九五八）は、「『うつほ物語』は、物語の世界を如何にして現実化するかという課題に、この日記的方法をとることによって答えようとしているわけである。作者は、自分の作品が人生における事実ありのままの真実を傳えるものであることを主張するために、できるだけその物語を日記体に近づけようとする。事実の細々とした説明、人人の一挙一動をも逐一丹念に記録することによって、その真実性が補證されると考えるのである。」（五七頁）と述べる。「カクテ」と「カカルホドニ」は物語の「真実性」を支えるために、時間とのかかわりの中で物語を表すために有効な接続語であったと考えてよいかと思われる。

四．まとめ

本論では「カクテ」と「カカルホドニ」の、中古和文物語作品における使用を調査し、その意味、用法に注目してその差異を明らかにした。

・「カクテ」は従来その意味、用法が明らかではなく、先行研究では歌物語における歌との位置関係（糸井）や物語内容の区画の提示（西田）などの観点からの説明がなされてきたが、それを検証して、それらの観点からの説明に再考の余地があることを示した。

・「カクテ」と「カカルホドニ」の構成要素である指示副詞「カク（カカ）」の意味、機能を再検討することと、「テ」、「ホドニ」の意味、機能を確認することで、両語の意味、用法の差異は表せることを示した。具体的には、

①中古期の「カクテ」や「カカルホドニ」は、話の場やその前文脈に「カク（カカ）」で指示される内容が存在しているという意味で、指示のしかたが実際的、具体的なのであり、具体的な物語の話の中の存在事態や実際に表されている物語の話の内容そのものを直接的に指示するのに適した接続語であると考えられる。

②さらに助詞「テ」は「文脈に対応する現実の脈絡に依存」する形で事態や出来事を継起的に表す。また、「ホドニ」は時の経過につれて徐々に変化をする事態や出来事について、その変化を経過的、推移的に表す。「カクテ」と「カカルホドニ」の意味、用法の差異は、この「テ」と「ホドニ」の差異であり、両語は物語の話と時間の情報とのかかわらせ方が異なる語であると考えられる。

③「カクテ」と「カカルホドニ」の接続について言えば、「カクテ」は「カクテ」の前部に表されている事態、内容を直接的に踏まえ、それらをまとめて総括的に「カクテ」の後部に関係付ける形の接続を行い、「カカルホドニ」は「カカルホドニ」の前部に表されている事態、内容を直接的に指しなが

ら、それらを流れる時間の中に配して「カカルホドニ」の後部に関係付ける形の接続を行う。

・さらに、両語は時間とのかかわりの中で物語を表していく機能を持った接続語であることが、中古和文物語作品中での両語の多用につながり、それは物語の中の《日付》、《各巻の冒頭》、《絵詞》の詞文などに注目した際の、それらの箇所での使用に具体的に見ることが出来ることも示した。

（注）

（1）「文の成分の一つ。語と語、句と句、文と文とを結び合わす働きを有する成分。」（『日本文法大辞典』松村明編、三八三頁。渡辺実執筆担当による。）を、ここでの「接続語」の定義とする。また、本論では「カクテ」と「カカルホドニ」を共に「接続語」として考えるものとする。

（2）「作品の展開を受けとめる「かくて」や「かゝる程に」なども、また、当然ながら一記事を時間の動的な流れの上に置くのだが、」（渡瀬（一九八一）一九頁）や、「和文においては「さ」系と「か」系が中心であり」（高橋（一九八五・一三頁）のようにまとめて扱われていることを指す。

（3）「会話や心理描写を中心とする精緻な叙述を、より説明的・概括的な叙述へと、（渡瀬・一七頁）変換することを、「叙述の質を変換する」（渡瀬・同頁）と述べている。

（4）以下、糸井（一九八七）を「糸井（同）」、西田（一九九九）を「西田（同1）」、西田（二〇一〇）を「西田（同2）」とする。

（5）本論では「カクテ」と「カカルホドニ」についてを考察対象とし、これらに係助詞や副助詞が付いた「カクテモ」、「カクテコソ」、「カカルホドニモ」、「カカルホドニコソ」などの形式は考察対象として含めない。また、本論では以降、「カクテ」・「カウテ」、「カカルホドニ」と表記を統一する。

（6）国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス』https://chunagon.ninjal.ac.jp/ を指す。

（7）ジャパンナレッジLib（株式会社ネットアドバンス提供）http://japanknowledge.com/ を指す。

（8）本論でテキストとして用いた『新編日本古典文学全集』の『伊勢物語』の底本は学習院大学蔵三条西家旧蔵伝定家筆『伊勢物語』であるが、「底本になく他系統書本にある章段については、底本の百二五段の後に異一、異二……等として掲げた。」（一〇九頁・凡例）とあり、その異文中の用例（「カクテ」1例）はここでは含めていない。

（9）これはつまり、中古期には「カクテ」、「カカルホドニ」のような指示詞由来の接続語は、指示詞部分が実質的な指示内容をもつ、いまだ副詞として機能しており、機能語である接続詞として見るのは尚早であることを意味していると考えられる。

（10）「直示用法…今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象があるもの。照応用法…先行する言語テキスト内に当該の指示表現と指示対象を共有する先行詞があるもの。」（岡崎（二〇〇二）、二頁）より抜粋。

（11）なお、金水（一九九九）は上代のコ系列の照応用法は、直示用法と近いことを述べる。（「コ系列とア系列は、直示用法が原型的な用法であり、文脈照応用法と見られるものでも、直示的な性質を色濃く残している」（八七頁））。コ系列には「カク」の形態

をもつ「カクテ」も含まれるが、上代から中古初期は、話の場そのものに存在するモノやコトについてことばで表し（直示）、そのことばを指示してさらにそれを言語で表す（照応）用法、つまり直示用法と照応用法が対立的な用法として確立する以前の段階であったと考えるのが適切であろうと思われる。

(12) 西田（同2）で挙げている例のうち、本論でも考察対象とする例について確認したところ、全て西田（同1）で挙げている例に含まれているので、ここでは西田（同1）の例をもって、以下考察する。

(13) 本論でテキストとして用いた『新編日本古典文学全集』の『源氏物語』①「紅葉賀」、三四七頁の同本文部分の頭注（頭注番号一九）には、「藤壺の立后。重大な公事なので「めりし」と婉曲に叙する。」とある。

(14) 「カクテ」の後に公的な行事などの内容が続く場合が多いことは、渡瀬（一九八一）にも指摘がある。「（論者注：『源氏物語』の「カクテ」の例を数例挙げた後で）勿論、ここに見られる「かくて」は文章や記事を結び合わせているのだが、その記事の内容にいささかの偏りを見せている。これらの例に於いて、その記事の内容は袴着や立后、婚姻、賀宴、行幸など、公的な行事としての性格の強いものを扱っている。」（一六頁）同じくこれも再考を要すると思われる。

(15) 塚原（一九五八）、八七頁、奥村（一九六七）、八七頁、吉田（一九七〇）、六七頁による。

(16) 「上古の万葉集から平安朝の仮名文に連なる線は、日常語に近い、いわば口語的な系統であつて、ここでは「て」が優勢、宣命から漢文訓読文に続く系統は、日常語からやや離れた、文語的な特色を持ち、ここでは「して」が主として用いられたものと思われる。」（此島（一九五八）、三一八頁）

(17) 「活用語の連体形に接続し、「(A)に(B)」の形式において、(A)と(B)との分離を認めながらも、連続的な統一をなす機能を持つ。」（塚原（一九五八）、八九頁）、「もともと、格助詞からの転成である故、はじめは、時・場所等を単純に示す用法が多かったが、次第にはっきりした因果関係の表現に移って行った。因果関係の表現は、奈良時代にも、或る程度存するが、平安朝に比すれば少い。」（奥村（一九六七）、八五頁）

(18) 「かくて、六月六日、子生まるべくなりぬ。」（『うつほ物語』俊蔭、六七頁）、「かくて、七月ついたち、うちの帝、仁寿殿の、大将の御息所の御局に渡りたまひて、『などか、（略）あないとほし』。」（『うつほ物語』内侍のかみ、一五九頁）「かくて、九日の夜は、大殿、内裏の大饗の御前のものしたまふ。」（『うつほ物語』国譲中、一五六頁）などの、《日付》と共起した「カクテ」の例を指す。

(19) （表一）の「カクテ」【Ⅲ型】と【Ⅳ型】の地の文の例（四〇〇例＋五三例）マイナス（表三）の※5の「カウテ」【Ⅲ型】と【Ⅳ型】の例（七例＋三例）＝四五三例マイナス一〇例＝四四三例。

(20) （表二）の「カカルホドニ」【Ⅲ型】と【Ⅳ型】の地の文の例九四例＋一例）＝九五例。

(21) 鈴木（一九八七）、二六頁。

(22) 物語の構造上、「沖つ白波」以外は全て物語中の話（エピソード）の開始部にあたる。また、「内侍のかみ」と「沖つ白波」は年立（この論でテキストとして使用した『新編日本古典文学全集』の『うつほ物語』②の六三一～六三八頁）で確認すると、他の巻

とは独立的な巻である。つまり、「カクテ」、「カカルホドニ」で始まる冒頭文を持たないこれらの巻は物語中で、物語の話の内容や物語中の時間が、他の巻とは連続的な関係にない巻であることが確認できる。

(23)「現存の『うつほ物語』の本文には、写本、版本を問わず、「絵詞」あるいは「絵解」と呼ばれる、物語本文とは異質な詞文が存在する。古代の物語文学の中で、このような本文の形態を持つ作品は他に例を見ないところから、それが何であるかについては早くから解明の努力が続けられてきた。そのいちおうの成果として、それらはもと画面の中に書きこまれた説明書きで、「絵解」あるいは「絵注」とでも称すべきものであろうということになっている。」（『新編日本古典文学全集　うつほ物語③、解説』（中野幸一著、六五五頁）「『うつほ物語』の物語本文の間に混在する「絵解」あるいは「絵詞」とされている本文については諸説あるものの、実態に合わず、まだ解明に至っていない。」（阿倍（二〇〇九）、五九頁）

(24)《絵詞》直後の物語本文が「カクテ」である例の数には「かくて、また」や「かくてあり経るほどに」を含む。また、《絵詞》直後の物語本文が「かかることを」である例も2例見られたが、この形式は本論での考察対象ではないため、この例の数は含めて考えない。

(25)（37）中野（一九八一）四二二頁。また、室城（一九九六）にも、「『うつほ物語』の「絵詞」あるいは「絵解」については、「絵詞」なのか「絵解」なのかということも含めて、これまでにも、さまざまな研究が積み重ねられてきた。物語本文と同一作者なのか別作者なのか、物語本文と同一時期の成立なのか後期の補入なのか、あるいは、物語を絵画化するための指示・注文なのか絵巻などについていた詞の本文への混入なのかなど、さまざまな観点から問題にされてきたが、いまだに説の一致を見ない。」（四二九頁）とある。

（参考文献）

●参考文献

安倍素子（二〇〇九）『うつほ物語の成立と絵解の研究』風間書房

池上禎造（一九四七）「中古文と接續詞」『國語・國文』第15巻第20号、京都帝國大學國文学会、一―九九頁

石垣謙二（一九五五）『助詞の歴史的研究』岩波書店

糸井通浩（一九七九）「『大和物語』の文章―その「なりけり」表現と歌語り―」『愛媛国文研究』第29号、愛媛国語国文学会、一〇―一八頁

糸井通浩（一九八七）「中古文と接続語―「かくて」「さて」を中心に―」『日本語学』第6巻第9号、明治書院、八四―九四頁

糸井通浩（一九九九）「古典にみる「時」の助動詞と相互承接―『枕草子』日記章段における―」『国語と国文学』（一〇三二号）、東京大学国語国文学会、一―一一頁

大木恵美子（一九七六）「大和物語における「かくて」の考察」『二松学舎大学人文論叢第9輯』二松学舎大学人文学会、一―一四頁

岡﨑友子（二〇〇二）「指示副詞の歴史的変化について―サ系列・ソ系を中心に―」『国語学』第53巻3号、一―一七頁）

岡﨑友子（二〇一一）「指示詞系接続語の歴史的変化―中古の「カクテ・サテ」を中心に―」『日本語文法の歴史と変化』青木博史編、くろしお出版、六七―八七頁

岡崎友子（二〇一三）「中古における接続語の使用傾向について」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、2013年9月、国立国語研究所、一六七―一七六頁
神野藤昭夫（一九九六）「六国史と歴史の手法」『岩波講座日本文学史第2巻　9・10世紀の文学』久保田淳、栗坪良樹、野山嘉正、日野龍夫、藤井貞和編、岩波書店
京極興一・松井栄一（一九七三）「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹　編『品詞別日本文法講座6　接続詞・感動詞』明治書院、九〇―一三六頁
金水敏・田窪行則編（一九九二）『日本語研究資料1　指示詞』ひつじ書房
金水敏（一九九九）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4、言語処理学会、六七―九一頁
金水敏（二〇〇〇）「指示詞―「直示」再考―」中村明編『現代日本語必携』『別冊國文學』53、學燈社、一六〇―一六三頁
此島正年（一九五八）「接続助詞「て」と「して」」『國學院雑誌』第59巻、國學院大學、三一三―三一九頁
佐藤喜代治（一九六七）「古典解釈と助詞」『国文学解釈と教材の研究』第12巻2号（臨時増刊号）「接続助詞」の項（塚原鉄雄執筆）六一―八九頁
鈴木一彦、林巨樹編（一九七三）『品詞別日本文法講座9　助詞』明治書院
鈴木日出男（一九八七）「年中行事と歳時意識」『国語と国文学』（七六〇号）東京大学国語国文学会、二四―三五頁
高橋尚子（一九八五）「中古接続詞の機能と意味―物語文学作品を資料にして―」『愛文』第21号、愛媛大学法文学部国語国文学研究会、八―一七頁
玉上琢彌（一九六六）『源氏物語研究　源氏物語評釈別巻一』角川書店
塚原鉄雄（一九五八）「接続助詞―場・と・ども・とも・とて・つつ・で・を・に・が―」『国文学解釈と鑑賞』（二六三号）、至文堂、七三―八九頁
中野幸一（一九七三）「『うつほ物語』の叙述の方法―長編物語への試み―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』19、四五―六二頁
中野幸一（一九八一）『うつほ物語の研究』武蔵野書院
西田隆政（一九九九）「指示語「かくて」と源氏物語の段落構成」『国語語彙史の研究』18、国語語彙史研究会、和泉書院、八七―九九頁
西田隆政（二〇一〇）「源氏物語の地の文における指示語「かくて」の用法について―「転換」の用法の問題を中心に―」『源氏物語の展望』第八輯　森一郎、岩佐美代子、坂本共展編、三弥井書店、八五―一一三頁
野口元大（一九五八）「うつほ物語の構造」『宇津保物語新論』宇津保物語研究会編
三苫浩輔（一九七四）「現存宇津保物語の文体と作者―「かくて」類語句を中心に―」『國學院雑誌』4、國學院大学、三七―四八頁
宮谷聡美（二〇〇四）「『伊勢物語』という「歌物語」―六五段「在原なりける男」の長編的性格から―」『国文学研究』第一四二集、早稲田大学国文学会、一一―一九頁
室城英之（一九九六）『中古文学研究叢書2　うつほ物語の表現と

論理』若草書房
望月郁子（一九六九）「類義語の意味領域―ホドをめぐって―」『国語学』第78号、国語学会、三四―五一頁
本宮洋幸（二〇〇九）「『うつほ物語』の語りと時間」『国語と国文学』平成21年2月号、（一〇二三号）、東京大学国語国文学会、一六―二八頁
森一郎・岩佐美代子・坂本共展（二〇〇七）『源氏物語の展望　第一輯』三弥井書店
山口堯二（一九八〇）『古代接続法の研究』明治書院
吉田金彦（一九七〇）「接続助詞　て（とて）・して・で・つつ・ながら・や〈し〉〈ても〉」『国文学解釈と鑑賞』第35巻第13号、至文堂、六七―七七頁
渡瀬茂（一九八一）「『栄花物語』正篇における歴史叙述の時間―「かくて」の機能をめぐって―」『国語と国文学』第58巻第9号、東京大学国語国文学会、一二―二三頁

●参考資料
松村明編（一九七一）『日本文法大辞典』明治書院、
大曾根章介、檜谷昭彦、堀内秀晃、服部幸雄、森川昭、久保田淳、山口明穂、三木紀人、遠藤宏（一九九八）『日本古典文学大事典』明治書院
中村幸彦、岡見政雄、阪倉篤義編（一九九九）『角川古語大辞典』角川書店

●用例採集資料
・『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』片桐洋一　福井貞助　高橋正治　清水好子　校注・訳（一九九四）『新編日本古典文学全集』12（小学館）
・『土佐日記』『蜻蛉日記』」菊地靖彦　木村正中　伊牟田経久　校注・訳（一九九五）『新編日本古典文学全集』13（小学館）
・『落窪物語』『堤中納言物語』三谷栄一　三谷邦明　稲賀敬二　校注・訳（二〇〇〇）『新編日本古典文学全集』17（小学館）
・『うつほ物語』中野幸一　校注・訳（一九九九～二〇〇二）『新編日本古典文学全集』14～16（小学館）
・『源氏物語』阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男　校注・訳（一九九四～一九九八）『新編日本古典文学全集』20～25（小学館）
・検索サイト　ジャパンナレッジLib　http://japanknowledge.com
・国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス』https://chunagon.ninjal.ac.jp/
（最終アクセス日　共に二〇一八年二月二八日）

（ももせ・みのり　本学大学院博士後期課程）